
5. 青空市場

フランシス・ローレライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5. 青空市場

【Nコード】

N1752T

【作者名】

フランシス・ローレライ

【あらすじ】

イサムがマミを招待したのは、ウィーンのアメ横、ナツシュマルクトのアパートだった。

ウィーンのナッシュマルクト地区には青空青果市場があり、最寄り駅は、地下鉄のケッテンブリュッケンガッセ（ケッテン橋通り）。この界限は毎週土曜日、大規模な蚤の市が立つのである。

当日は、オーストリア周辺の国のみならず、イスラム圏や東洋からも移民や出稼ぎ労働者が集まり、一種独特の怪しげな雰囲気に包まれる。この日の制服は、革ジャンにジーンズ、それにくわえタバコと言わなければならない。

西暦2001年になりながら、ウィーンには相変わらず安全神話があったが、ここだけはスリや詐欺師が、今にも出そうな気配である。

あちこちの露店に、陶器やガラス、油絵、古いポスター、怪しげな彫刻、古銭、写真立て、ビーズ、化石、CD、アナログ・レコード、セーターやジャンパー、古い家具等、中古品や骨董品が所狭しと並ぶ。そして招き猫の代わりに、男女の交わりを描写した絵画や彫刻が、目立つところに飾られるのだ。

マイセンやヘレンドの掘り出し物を目当てに、観光客がカメラ片手にガヤガヤ集まってくる。

通りの向こう側には、中華料理屋さんやお寿司屋さん、日本食品店などが点々と並ぶ。カトリック社会の外縁で生活する人々が行き交うため、とてもエキゾチック。

イサムが津軽マミをアパートに招待したのは、四月初旬で、まさに蚤の市の立つ土曜日だった。

良く晴れて暖かい日だった。

彼は早めに起きてシャワーを浴び、ラジオのニュースを聞きながら、朝食をとっていた。

コッペパンのようなセンメルを、地元流に裏側のお臍の部分から

ちぎっては頬張り、ミルクをたくさん入れたコーヒーで流し込む。

ニユースが終わり、「恋は水色」のメロディーが流れた。ウィーンでは、ポップスでさえ、古典が好まれるのだ。

「今日は、ラッキー。少しきれいにしようか……」とつぶやきながら、彼は、その辺のものを片づけはじめた。夕べのお皿、オペラのCD、手紙等、雑多なものが散乱している。一週間の間には結構、散らかるものだ。

彼は、この日を随分と夢見たものだ。

舞踏会のあと彼女のアパートにたどりついたら、ソファに倒れこんでしまつて……毛布を掛けてくれた時、何だかキスされたような気がするのに、白雪姫と違って眠りから覚めずじまい。

そしてオペラの晩も、彼女をアパートまで送っていったら、隣のお婆さんが出てきて台無し……。

フランクフルター・アルゲマイネ新聞の芸能欄を読んでいるうちに、彼女を出迎えに行く時間が来た。11時の約束だった。

イサムは、すり減った石の古い階段をかけ下りて、中庭の方から大きく頑丈な木の扉を開ける。

そしてそのまま通りへ。

駅にたどりつくと、周辺には若者がたくさんたむろしていた。週末の買い物に來ている外国人のカップルも多く、特にアジア系の人たちが目立つ。いつもの土曜日のことながら、何やら華やいだ、そしてスケベついたらしく不健全なムード。

通りには、散らかったビンや缶からこぼれ出た酒やタバコ、そしてエキゾチックな香料の匂いが蔓延し、全ての神経を強く刺激する。マミは、少し遅れてやってきた。薄いグレーのコートを着ている。「やあ、お久しぶり!」と彼が叫んだ。

「待たせてごめん! ケーキ買っていたら、遅くなっちゃったの!」

「休日なのに、申し訳なかったね」

「ううん。随分と、人が多いのね」

「うん。市が立っているからね」と、彼が答える。

「あ、そうなんだ」

「この辺は、家賃も安いし」と、イサムが自嘲気味に言う。
そして彼は、雑踏をかきわけながらマミを案内する。

「5分で着くからね」

進行方向には観光名所を示す、白と赤の小さなオーストリア国旗が。

「あの旗は、なに？」と、彼女が指さしながら尋ねる。

「あんまり指ささない方がいいよ。あれは多分、シュューベルトの亡くなった家」

「へえ……入ったこと、ある？」

「ピアノが、置いてあったかな」と、気のなさそうにイサムが答える。

「シュューベルトの御霊験があると、良いんだけど……」

「えっ？」

「ほら、最終選考の課題曲に、シュューベルトがあるでしょう？」

目的地はその隣の、すすけたオレンジ色の建物だった。

イサムは鍵を差し込み、大きな木の扉を開く。

中は日陰で、異様に寒かった。正方形に近い中庭が見える。

昔は、ここから馬車が出入りしたらしいんだ」

「へえ……この階段も、随分とすり減っているわね」

「250年くらい、古いらしい……」と言いながら、イサムは階段をのぼりはじめ、彼女がついてくる。

踊り場まで来ると、彼のアパートのドアがあり、彼が鍵を差し込む。

カチャツという音が、あたりに響く。

ドアを開けながら彼は、

「どうぞ。お疲れ様でした」と言って、彼女をねぎらった。

「お邪魔します」

彼女は少し不安そうだ。

中は、とても暖かい。ついさっきまで、イサムがいたから。

壁は、緑色に白を混ぜたようなウグイス色で、最近ペンキを塗ったばかりの風情である。

椅子もテーブルもみすばらしい。一応目を引くのが、頑丈で重たそうな木の譜面立てだった。古い上、青空蚤の市で更に風化したのだろうか。

「へえ……意外と静かなのね」

彼がもう一度ヒーターをつけている間に、彼女は部屋をぐるりと見まわす。

「しいんとするもんだから、練習の時は、とても気を使うよね……隣のお婆さんには時々差し入れするけれど、いつも機嫌良いとは、限らない……さすがに土地っ子は、音楽系に寛大だと思うけど……」と、彼が説明する。

「分かるわ、その感じ」

「この部屋、実は最近、自分で塗り替えたんだ」と言うイサムは、少々自信ありげだった。

「悪くないじゃない、明るくて！」

「そう？ 良かった……コート、もらおうか？」

彼女は白と茶色の帽子を取り、いなくなのように長い髪をふりほどいた。そして薄いグレーのコートを脱ぎ、マフラーを取る。茶色いセーターの下には、白いブラウス。

彼女は上のボタンを一個丁寧にはずすと、ほっと息をついた。

「ええと、スリッパはく？ 一応、和式で」と言う彼は、いつの間にか靴を脱いでいる。

マミが床に目をやると、確かにスリッパが並んでいる。そこで彼女はしかたなくブーツを脱ぐことにした。

彼女が少しかがみながらブーツを脱ぎ始める。そこで、イサムの視線が妙に気になった。黒いスカートの下から、形の良いふくらはぎがのぞいている。

「久しぶりだね」

「そうね」

彼女は苦笑し、ブーツを脱いだ細長い左足を伸ばし、イサムの足を軽く踏んでみた。彼はその足のぬくもりを感じると、彼女の腰に手をかけ、身を寄せてきた。

彼女はそのまま、しなやかに後ろの壁にもたれかかり、顔を向けたまま目を閉じる。

二人は、しっかりと抱き合う。そして、熱い接吻。肌のぬくもりが行き交い、鼓動が通じ合う。

心臓が高鳴り、えもいわれぬ強い興奮が訪れはじめる。クリムトの絵の、金色の恋人たちのようだ。

ところが突然、イサムの携帯電話から、ベートーヴェンの「喜びの歌」が鳴り出した。

イサムはそのまましばらく、マミとの抱擁に溺れたままだ。彼女の体温を感じるから、そして……そのぬくもりに浸っていたいから。時間よ、止まれ！

でも、主張の強い音楽が鳴り続けるので、彼はしぶしぶ、彼女から身をふりほどくのであった。

「はい。国谷ですが……」

「平原です。お休みのところ申し訳ない。支店長が来週の火曜から、パリ出張で……アレنجお願いしていいかな、フライトに宿……」
やっぱり。

「本間支店長が？ 火曜日からですか？」

「そう。欧州支配人の召集で……」と平原さんが続けた。

「分かりました、早速手配します。ホテルは、パリの方で、押さえてくれないのでしょうか」

「そう言えば、そうだね。でも、週末だし、念のため押さえてくれ」「はい」と、イサムが無理して良い返事する。

「申し訳ないけれど、宜しく願いするよ。できれば八時台の出発で……すぐに動いた方が、良いかも知れないね」と言う平原さんは、そつがない。

「了解。何の会議でしょうね？」

「多分、世界ワイン・オリーブ協会で……」

電話が長引きはじめたところで、マミは「いい？」とイサムに指で示し、キッチンの方に姿をくらました。

彼女が戻ってきたところで、イサムはようやく電話を切ることができた。

「ごめん、タイミング悪かったね」

「出張するの？」と、彼女が問いかけた。

「支店長が、急にパリ出張らしい。世界ワイン・オリーブ協会とか言う、結社じみたのがあって……悪いけど、これから一仕事なのよ」
「分かったわ、ごめっくり」

地元の航空会社が休みらしいので、イサムは机上のパソコンに救いを求めた。ネット検索すると、航空会社の派手なロゴがスクリーンに浮かぶ。

そして、しばらくの後に彼は、

「よし、予約できたぞ！」と言いながら嬉しそうに手をたたき、キッチンに入っていった。

「うまく行った？」と、食器棚から振り向き様に、マミがつぶやく。

「やっとなれたよ」

「良かった、じゃん！」

「でも来週、もう一度電話しないと。それに、パリ支店にも……週末は、いないだろうなあ……」

「でも、自宅のメルアドとか？」と、彼女が気を回す。

「あとで捜そうと、思うんだ」

「じゃあ、ケーキ、食べよう？」

「ああ、有り難い」と、彼がほっとした表情で言った。

紅茶と共に食べるデーメルチェリー・パイは、なかなか味わい深かった。

「ここのお菓子って、いつも感動的だね」と、イサムが満足そうに言う。

「そう。ふわーっとしていて、私も好き」

「フルートは、いつからやっているの?」と、彼女がマグに紅茶を注ぎながら尋ねてくる。

「小学校以来。散発的だけど」と彼が答える。

「よく続いたわね」

「情性だね」

「美人の先生がいたとか?」と、彼女がいたずらっぽく尋ねる。

「そういう時期もあったかも。大学の頃、新宿でレッスン受けながら、オケに入って……」

「やっぱり!」

「指揮者のフィッシュマン先生、どう思う?」と、イサムが水を向けてみた。

「父の知り合いなの……」

「へえ」と答えながら彼は思わず、したり顔になる。

「なかなか中年にしては、カッコいいと思うわ。でも、日本人とは違うね……戸惑うこともある」

「ドイツ語だし、彼のスタイルに、慣れていないからだよ」と、イサムが彼女を諭す。

「そうかも知れない。あのアフロ・ヘアと口ひげが絶妙ね」

「多分、ヨハン・シュトラウスを気取っているんだよ」

「ところでウィーンって、やっぱり乾燥しているせいかしら、音の響きが違うわね。自分の声もよく響くの」

「そう。寒く乾燥した場所では、音の伝わり方が悠長だし……ウィーンの建物のように天井が高いと、自分のエコーさえ、聞こえるらしい。だから、音楽の都かな……」と言いながら、イサムは窓を開け、顔を出してみた。

行き交う人々のざわめきが聞こえてくる。そこで「蚤の市に行ってみない?」と、彼女にもちかけた。

二人は散歩がてら、表に出ることにした。
通りに出ると、青空と太陽。

イサムとマミは手に手を取り、駅を目指して歩き始めた。

あちこちに露店が立ち並び、観光客で賑わっている。

トルコ人やギリシャ人が店番するような、スパイスや香辛料が山積みされた店、あるいは野菜や果物、ナッツを売る店など、とてもカラフル。

「アメ横とか、浅草みたい！」と、彼女が嬉しそうに声をあげる。

目の前の店では、これ見よがしに羊肉を焼いており、トマトやたまねぎと合わせた大きなサンドイッチにして売っていた。

「結構、誘惑されるわね」

「ツヴァイ、ビッテ」と、イサムが注文する。

彼女が、期待に眼を輝かせる。

彼が狭い通りの向こう側に目をやると、茶色いアフロ・ヘアと口ひげの男がいた。

「あつ、うわさのマエストロじゃないか」

「あ、本当だ！」と彼女が黄色い声をあげ、あわてて手で口を塞ぐ。マエストロ・フィッシュマンは、カーキ色のコートに黒いブーツ、そしてロシア風の毛皮の黒い帽子という出で立ちだった。

「時々、この辺で出没するんだ。結構、ガラクタあさが好きみたい」

マエストロは、店の主人と、値段の駆け引きをしているようだ。手にした物が陽の光を受けて、キラキラ輝く。

「あれは多分、水晶。アルプスで採れるの」と、イサムがつぶやく。ちようどそこで、取引が成立した模様だ。

「先生、こちらを意識したようだね」とイサムが言った。

「いやあだ……フィッシュマンさんって、独り者だっけ？」

「そんな噂だよ。彼はルーマニア系で、ここで若い頃、苦労したらしい」

包みをもらったマエストロは、店の人と握手し、足取り軽そうに立ち去っていった。

「私たちに気がつかない振りしたわね」と、マミがコメントした。

「それがウーン流よ……意外と、シャイなんだ」

「気を使ってくれたのよ、きつと」と言いながら、彼女はイサムの手を取り、アナログ・レコードを売る隣の露店に誘導した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1752t/>

5. 青空市場

2011年8月10日03時22分発行